

空想物語は、建物のなかにも住んでいるのではないでしょうか。

ぼくは、仙台にある大学につとめています。もし、あなたが、ぼくの大学にいらっしゃったら、校門をいってまっすぐに来てください。正面に見えるのが、二号館という建物です。その二号館の一階の廊下を右へすすんでください。廊下のいちばん向こうまで行き、そこで右にまがると、となりの建物に入ります。三号館です。——ところが、そこは、三号館の二階なのです。

この廊下をはじめ歩いたときには、おどろかされました。一瞬、めまいがしました。二号館の一階から来たのだから、その先も一階のはずだと決めていた、ぼくのなかの思いこみがくずれて、「いつもの風景」の肩こしに、「何かちがったもの」が顔をのぞかせたような気がしました。そこは、三号館の入り口ではなくて、空想物語のとば口だったのかもしれない。

種あかしをすれば、何でもありません。二号館は、小高い丘の上に建っていて、三号館は、その丘の下にあるのです。丘の高さは、ちょうど建物の一階分あたり、丘の上の二号館の一階と、丘の下の三号館の二階とが同じ高さになるというわけです。

この大学につとめて、そろそろ十年になろうとしています。ぼくの研究室は、五号館とあって、また別の建物にあるのですが、ときどき、つまらない書類を書くのにすつかりあきてしまった午後などには、二号館から三号館への廊下を歩きに行きます。二号館一階から行っても、三号館の二階に出してしまうことは、よくよく承知しているのに、廊下の先を右にまがり、三号館に入るたびに、ぼくは、めまいします。大学の二号館から三号館へわたるあたりには、めまいが住んでいて、ぼくは、そのめまいに会いに行くのです。

ぼくの大学にしかけられている、めまいは、宮沢賢治の世界のあちこちにも、ひそんでいます。たとえば、「どんぐりと山猫」で、一郎が山猫たちのいるところにとどり着くくぐりも、くらっと、めまいがするようです。

「樞の枝はまつくろに重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまつかかにして、汗をほとほとおとしながら、その坂をのぼりますと、にはかにぱつと明るくなつて、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まはり立派なオリーブ色いろのかやの木のもりでかこまれてありました。」

一郎が暗い坂を登りつめると、そこには、明るい草地がひらけていました。
「風の又三郎」では、山の村の小学校にふしぎな転校生がやってきました。

「そのとき風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、学校のうしろの山の萱や栗の木はみんな変に青じろくなつてゆれ、教室のなかのこともは何だかにやつとわらつてすこしうごいたやうでした。」

ここでも、ぼくたちは、テレビの画面がゆらぐような、そんな感じにおちいります。

ぼくが大学の廊下で出会う、めまいを育てていったところに、賢治の世界が成り立つのかもしれない。ぼく

にとつて、宮沢賢治の童話を読むことは、めまいの練習をすることにほかなりません(賢治童話は、「めまいの練習帳」です)。それは、決まりきった「いつもの風景」から脱出して、自由になるためのレッスンです。

賢治は、童話集『注文の多い料理店』(杜陵出版部・東京光原社、一九二四年二月)の「序」で、こう書いています。

〈これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。〉

「シグナルとシグナレス」は、右の童話集におさめられたものではありませんが、やはり、鉄道線路でもらつてきた話でしょうか。シグナルの柱がかたんと腕木をあげたときに、「いつもの風景とはちがう世界が、かいま見えたとのかもしれない。ここでは、シグナルとシグナレスがへずうつと積まれた黒い枕木」をへだてて恋をささやいていました。

「シグナルとシグナレス」は、いくつも歌が出てくる「歌物語」でもあります。へガタンコガタンコ、シユウフツフツ、／さそりの赤眼が 見えたころ、／四時から今朝も やつて来た。／遠野の盆地は まつくらで、／つめたい水の 声ばかり。と、作品のはじめで軽便鉄道がうたう歌。へゴゴン、ゴゴゴ、／うすい雲から／酒が降り出す、／酒の中から／霜がながれる。ゴゴンゴゴゴという本線シグナル付きの電信柱がうたう、でたらめの歌。

「かしはばやしの夜」の歌も、「鹿踊りのはじまり」のそれもそうですが、賢治童話のなかの歌は、どれも、読み調子がよくて、ことばの意味をわすれて、ことばのひびきやリズムを楽しんでしまいます。そして、これもまた、ぼくたちのなかの「いつもの風景」をふみはずすレッスンなのかもしれません。なぜなら、ぼくたちのふだんのくらしのなかでは、ことばは、いつも、特定の音が特定の意味としっかり結びついているものだからです。そし

て、みんながそのことを了解していて、ことばで意志を通じあわせたり、約束をしたりしています。ぼくたちのくらしは、ことばによって秩序立てられ、ことばで、がんじがらめになっているときえ言えるかもしれません。ことばの音が意味をはなれてひびきはじめるとき、ぼくたちは、「いつもの風景」をこえた世界にいるのかもしれないのです。